西南戦争と海軍

中林幸夫
（会員・香川県綾歌町）

私は、昭和二十七年創設されてまだ日も浅い海上保安庁に入庁、門司に所在する第七管区海上保安本部に勤務した。ビルの中には約三百名の職員がいたが、その中に鹿児島県人会と熊本県人会があって、彼等は月に一度酒席をはってお互いに気炎をあげていた。

私のような他県の者には、何が県人会かと不可思議だった。同室の鹿児島の人にわけを聞いてみると、西南戦争以後なにかにつけて敵愾心があるのだと言う。そして西南戦争は鹿児島の侍が熊本の百姓に負けたんだとつっけんどんに言った。

西南戦争は西郷隆盛の教える私学校の門弟達が、旧藩士の不満を爆発させて始まったもので、西郷は「今般政府へ尋問の筋これあり」として、明治十年二月十五日、鹿児島を出発、上京を開始したもので、途中で反撃されるなど予想していなかった。そのため、第一に通過する熊本城鎮台司令官谷干城に対して、通行の際は指揮を受けよという内容の手紙を送りつけていた。

西郷は出発に先だち、「戦略！そげなもんごわさん。熊本鎮台兵どもが征路を遮るなら、ただ一蹴して通るだけでごわす。」と言って、政府軍と一戦も交えることなく東上できるものと確信していたようである。

東上を開始した薩摩軍（以下略して薩軍と書く）は旧藩士・軍夫を合わせて約四万人。これを知った政府は東上を阻止せんがために、二月十八日東京から九州への援軍を船舶により輸送し、鎮台では谷干城が熊本城に籠城して薩軍を迎え討った。

熊本鎮台兵は徴兵により集められた百姓を主体とした兵隊であったが薩軍の進撃を許さず、政府軍は日を追うごとに増強されて、田原坂をはじめ県下各地で戦闘をくりひろげ、激戦につぐ激戦のため薩軍は武器や食糧の補給がままならず、各地で敗退して進路を豊後に向けた。

五月十二日から十三日にかけて、豊後に侵入した薩軍は竹田に姿を現し、旧岡藩の藩士に内情を訴え、六百名が協力することになり戦闘地域は豊後に移った。

大分県庁では香川真一長官が県庁死守の決意を固め、

救援のため入港した軍艦「孟春」の大砲二門を取り外して県庁内に据え、守備を固めて薩軍の進路を防ぎ、その間に政府軍は海陸から援軍を送り薩軍と戦った。

この頃の薩軍は鹿児島出発後約百日が過ぎていて、武器・食糧の欠乏と長期にわたる戦闘で死傷者も多く、その姿は見るからに哀れで、各地で略奪的な行動をとり退却の際には町に火を放つ等、敗者のもがきを重ねていたようで、竹田（五百戸）・臼杵で多くの家が灰燼に帰したという。

竹田・三重・臼杵・重岡・三国峠等の戦いは抜刀隊による白兵戦で、斬死した戦死者の死体が無惨に転がっていた。

五月二十五日、約三百名の薩軍が佐伯城下に侵入して来た。一隊は城北・中野越から馬場先口を通り養賢寺へ、別の一隊は番匠川を渡船して城下に入り、残る一隊は西桝形を経て角石のコースで侵入した。

彼等はまず警察署（大分県警部第五佐伯出張所）・裁判所（佐伯区裁判所）・学校等に乱入して建物を破壊し、各要所を固めるとともに蟹田・揚場（現駅前区）付近の海岸に歩哨線を張り、城下の者の逃避を防いだ。そして養賢寺に郡内の総代伍長（現在の町村長）を集め、抜き身をかざして旧藩士は従軍、町方・浦方は歩方（軍夫）か軍資金を出すように迫り、旧藩士四十名が従軍して十一名が戦死した。

旧藩士の多くは情報のない時代のため戦争の内容がわからず、佐伯を脱出して付近の漁村に身を隠した者も多かったようである。（鶴見町沖松浦桑原家にも、高妻嘉太夫が身を寄せたという。）

こうした薩軍侵入の情報を聞いた海軍の「浅間艦」が、五月二十六日大入島に入港。守後浦沖に錨を入れてボートを降ろし、水路の測量をするため長島川河口の堤防下に向かっているとき、竹垣の蔭から不意に射撃されて水兵数名が倒れ、内二名が死亡した。

これを見た浅間艦は直ちに砲門を開いて攻撃を開始。これにより薩軍は延岡方面へ退却した。ペリーの黒船来航以来、日本人は軍艦には精神的にも弱かったようである。

六月二日には臼杵の薩軍に対して政府軍が三重方面から攻撃を開始し、海上からは軍艦「孟春」「浅間」が砲撃を加えたので、薩軍は津久見方面へ逃走し、切畑（弥生

町）―重岡―小野市へと退却した。

薩軍の豊後侵攻で指揮をとっていた野村忍助は、再度重岡奪還を図らんとして、宗太郎・赤松峠・陸地口・切込谷で死闘をくりひろげたが、目的を達することができず延岡方面へと退却した。

海軍は当初、豊後の海岸線警備は「孟春」一隻だけを宛てていた。「孟春」は別府湾から臼杵を経て佐伯湾に入港していたようである。

戦局が豊後に移ってから「孟春」以外に、「浅間」「日進」「鳳翔」「丁卯」「清輝」が加わって薩軍に攻撃を加えるとともに、精神的な威圧も加えたようである。これら艦艇は蒲江町猪串浦の弁天島沖に錨を入れて、食糧の補給や給水をしていたと聞く。

今から二十年くらい前、猪串湾に艦艇が錨を入れていたという場所へ行き、付近にあったモジャコの養殖筏にとび乗ったところ、当時は養殖筏が青竹を組み合わせて作ったものであったため、体重で浸水して困ったことがあった。また、佐伯海上保安署長に着任した人が薩摩隼人で、西南戦争の戦跡地に大変興味を持っていて、波当津から延岡への戦跡地をたどったことがあるが、行き止りの道であったりして大変だったことを思い出す。

西南戦争の死傷者は

政府軍、一万六千九百九十五名（死亡六千五百二十七名）

薩摩軍、約一万五千名（約七千名）

この狭い九州で同じ民族同士が戦い、多くの人々が血を流して死んで行ったのだから、鹿児島県人会が気炎をあげていたことも少しは理解できるような気がする。

一方、旧長岡藩では戊辰戦争の怨念を晴らす好機とばかりに、藩士多数が警視隊に応募し、池田九十郎は別動では第三旅団に属する警視隊に配属され、警部に任用されて六番小隊長となり、五月二十一日佐賀関に上陸。豊後国―竹田―梅木村と転戦して七月十六日に負傷し、七月十九日佐伯港から大阪病院に運ばれたという記録等があることから、輸送船が度々佐伯港に入港していたことも推測できる。

記録によれば政府軍の参加艦艇は十二隻、輸送船は十四隻で、もしこれら船舶の参加がなければこの戦いはもっと長期化して、国家的な内乱になっていたかもしれない。

明治十四年といえば文明開化が始まったばかりの時代で、煙を吐いて走る蒸気船が佐伯に入港した最初ではな

かったろうか。

僅か百二十年前のことであるのに、軍艦・輸送船に関する記録が少ないのはなぜか。浅間で死亡した二名の乗組員は何処に埋葬されたのだろうか。

佐伯招魂所には軍人・警官・軍夫を含む百四十八名の戦没者が埋葬されているが県外関係者のみで、薩軍に従事させられて戦死した旧佐伯藩士十一名は哀れである。

軍艦浅間等の佐伯入港がなかったなら、竹田のように火を放たれて灰燼と化し、薩軍の撤退がおくれてより多くの人が苦しめられた筈である。

大型の軍艦や輸送船を、海図は勿論灯台一つない時代に、未知の佐伯港へ入港させることはなみ大抵ではなかったと思う。守後沖に錨を入れてからも、どこへボートを着けるか苦慮したことであろう。

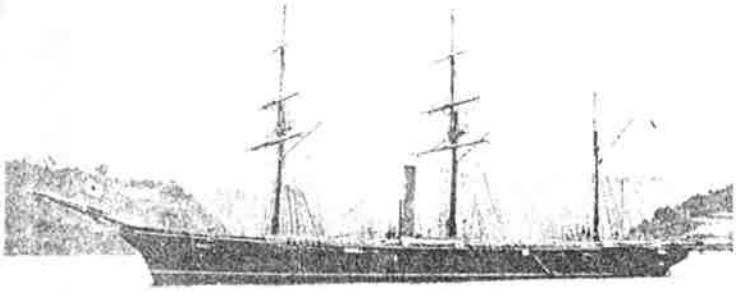
佐伯の記録に「慶応四年、大江灘三九郎谷に船入場を設けて御召艦を繋ぐ」。という下りがあり、三九郎谷前の川岸にそれらしい崩れた石垣を見るたび、私は本当に御召艦を繋いだのだろうか、佐伯入港最初の軍艦なのかと疑問を抱いている。ギネスブックではないが、最初の記録は残して置いた方が子孫のためと思うが！

佐伯に蒸気船が最初に入港したのはいつだったか、正確に知りたいものである。

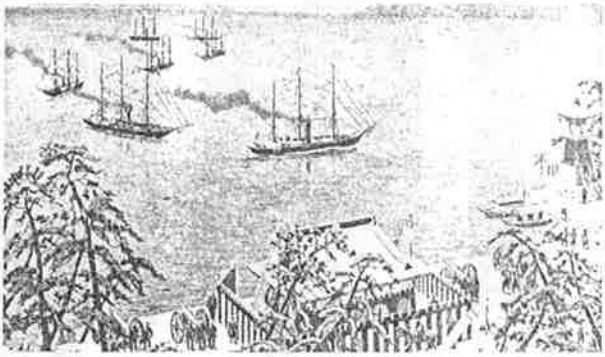
（参考資料）

西南戦争に参加した海軍
艦艇及び輸送船

軍艦	輸送船
春日	明治丸
筑波	西京丸
産驤	黄竜丸
清輝	赤竜丸
鳳翔	玄武丸
孟春	隅田丸
浅間	和歌浦丸
日進	全済丸
丁卯	金川丸
東	大有丸
雷電	鹿児島丸
高雄	社寮丸
（仮装軍艦）	蓬莱丸・寧静丸



明治９年に竣工した最初の国産軍艦「清 輝」
排水量897トン 全長61.15メートル ９ノット



明治元年 大阪天保山沖で行われた観艦式